

一、蟲巢焼拂の幕令
田畑に蟲付候處ども蟲の巢殘よし。かや等の根にむかこのごとく成物取付、或は土の一二寸下に生じ候も有之由に候間、可心付儀に候。若左様の所候はよし。かやは焼拂、又は土を掘り焼拂可申事。
右之趣可被相觸候。以上。

二 月

一、松平左近將監交付の書付
松平左近將監殿御渡候御書付の寫一通遣申候。以上。

二月二十日

大目付

松平加賀守殿留守居中

一、金貳萬兩宛拜借 六人

紀伊中納言 松平安藝守

細川越中守

松平筑前守 松平信濃守

松平大膳大夫

一、金壹萬五千兩宛 二人

松平土佐守 有馬中務輔

一、金壹萬二千兩宛 三人

松平幸千代 松平隱岐守

小笠原遠江守

一、壹萬兩宛 三人

奥平大膳大夫 立花飛騨守 伊達遠江守

一、七千兩宛 四人

松平主殿頭 牧野越中守 土井大炊頭

中川内膳正

一、金五千兩宛 六人

松浦肥前守 稻葉能登守 岡部美濃守

松平周防守 黒田甲斐守 加藤遠江守

一、金三千兩宛 拾二人

松平左京大夫 龜井因幡守 松平筑後守

大村河内守 秋月長門守 松平對馬守

松平市正 木下主税 相良遠江守

毛利周防守 伊達若狹守 松平式部少輔

一、金貳千兩宛 九人

宗對馬守 五島大和守 松平志摩守

久留嶋信濃守 松平備前守 一柳兵部少輔

立花出雲守 小笠原近江守 松平大膳

一、金千兩 一人

五千石交代寄合
木下縫殿介

一、金六百兩 一人 三千石交代寄合 五島修理

人数四拾七人。金高三拾貳萬九千六百兩。

物成半分を越候に付、拜借金御斷。六人。

松平大隅守 松平相模守 松平大炊頭

松平左兵衛督 阿部伊勢守 伊東修理亮

五ヶ年均取箇書付被指上候上、御吟味を以拜領被仰付。三人。

嶋津但馬守 片岡石見守 伊藤若狹守

蟲付候得共拜借不被及候。十九人。

阿部豊後守 土屋但馬守 脇坂中務少輔

石川主殿頭 京極佐渡守 仙石信濃守

鍋嶋加賀守 九鬼丹後守 毛利主水正

鍋嶋攝津守 鍋嶋備前守 細川山城守

毛利但馬守 木下美濃守 青木甲斐守

加藤織部正 板倉左近 京極修理

五千石交代寄合
山崎兵庫

右之趣江戸より申來候。

一、木實を降らす

癸丑三月十日夜南風甚吹。十一日大雨。未時戌刻甚雷。天雨木實。色黃白赤。形類大小豆。前月以來。伊勢・近江州雨大小豆去。木藩至是月如此。能州殊多云。

一、駿臺雜話西丸へ進獻の儀室鳩巢來狀

先主來書之旨駿臺雜話西丸へ進獻以後、御側醫者中私宅へ見廻被申。其節此程私より上申假名書の物、大納言様御意にも應じ首尾

宜敷御座候。か様の儀御聞被成候事、結構成御儀の由咄被

申候。御よませ御聞被成候時分、醫師中なども聽聞候様子

に候。御本丸へも參候哉、其段は未承候。雜話の中、佛者

虚を實にする一件、老夫了簡如此に候。古人の論は承不申

候。先年藏人殿發端にて、太極圖を講じ候。其時の學書其

後貴殿御調置給候。只今爰元に有之候。去年太極圖を講じ

候時分、取出し見申所よほど宜敷候。此分にて置候事はを

しき儀と存候。其上太極圖をも注し置申度由、尾張の家老

並の人鈴木丹後守と申人へ咄し候へば、其後なにとぞ早く

仕立候様にと被申越候。其故旁當春存立、注を撰び申候。

中々精微至極の儀に候故、急に難決事共有之、はか參不申

候。いかさま一兩年には爲致首尾可申と存候。追て小寺・青